

文献紹介：

民国期における中国社会学への二つの建議

A. R. ラドクリフ-ブラウン「中国郷村生活の社会学的調査に対する建議」
レイモンド・ファース「中国農村社会の團結性の研究—一つの方法論の建議」

西 澤 治 彦

解題

はじめに

ここで紹介する二つの文献は、A. R. ラドクリフ-ブラウンの「中国郷村生活の社会学的調査に対する建議」、およびレイモンド・ファースの「中国農村社会の團結性の研究—一つの方法論の建議」である。共に、燕京大学（1952年に北京大学に併合）社会学系が編輯していた『社会学界』に掲載されたものである。前者は、ラドクリフ-ブラウンが呉文藻によって燕京大学に招聘された際に、大学で行った英語による講義を呉文藻が編訳したもので、ラドクリフ-ブラウン記念特輯号となっている、第9卷（1936）に掲載されている。後者はファースがイギリスから送った論文を、費孝通が翻訳したもので、第10卷（1938）に掲載されている。

日本では『社会学界』を所蔵している図書館も少ない上に、欠本も多く、とりわけ第9、10卷が日本に一冊もないこともあってか^(註1)、ラドクリフ-ブラウンとファースが1930年代に、中国における社会学的な調査に対して建議を行っているということは、ほとんど知られていない。

しかしながら、二つの論文は、中国社会学の創設期において社会調査の進むべき方向性を提示しており、その後の斯学の展開と照らし合わせながら読み返してみると、まだまだ多くの示唆を我々に与えてくれる。また、人類学一般にとっても、人類学が社会科学としてその姿を現し始めた時に

あって、ラドクリフ-ブラウンとファースが、中国のような巨大な文明社会を次の研究対象とし、そのための方法論を模索していたというのは、非常に興味深いものがある。しかもファースの論文は本国では未発表のものである。

このように二つの論文は学説史的にも重要であるばかりでなく、人類学一般にとっても興味深いものであるが、日本では入手できないため、ほとんど読まれることもなかった。そこで本稿では、中国語訳の原文とともにその翻訳を掲載し、より広範な研究者や後学の便宜をはかりたい。

燕京大学とラドクリフ-ブラウン

中国における社会学・人類学の研究の流れ、およびその中における燕京大学社会学系と呉文藻の果たした役割、さらにラドクリフ-ブラウンとファースの建議の位置づけに関しては、拙稿「漢族研究の歩み—中国本土と香港・台湾」^(註2)すでに詳しく述べているので、ここではその要点のみを整理しておきたい。

1920年代から30年代は、社会調査の方法論からいえば、統計調査的なソーシャル・サーベイから、社会を総体として捉えようとするコミュニティー・スタディーズへの移行期であった。また人類学一般の展開からいえば、simple society で確立されたコミュニティー・スタディーズの手法を、中国という complex society で試してみると、という意味を持っていたし、比較研究のためにも中国社会のデータを待望していた。

こうした情況にあって、ラドクリフ-ブラウンは、呉文藻の招きで燕京大学に赴き、コミュニティー・スタディーズを提唱するとともに、機能主義的な人類学の考え方の普及につとめた。

中国におけるラドクリフ-ブラウンに関しては、Chien Chiao (喬健) の簡潔なレポートがある^(註3)。これによると、ラドクリフ-ブラウンが中国を訪れたのは1935年の10月末で、燕京大学の学長宅に泊まり、学部学生向けの“Comparative sociology”の講義のほか、社会学系の学生及び大学院生

向けのセミナーを担当した。講義には100人の学生が聴講したという。新年の休みに、ラドクリフ-ブラウンは武漢、南京、上海、広州を旅行し、各地で講演を行った。そして1936年の1月23日に北京に戻り、2月23日に中国を立ち、日本を経てアメリカに帰国している。従ってラドクリフ-ブラウンは中国に4ヶ月ほど滞在し、うち半分以上を北京で過ごしたことになる。

短い滞在ながら、ラドクリフ-ブラウンが燕京大学の同僚や学生に非常に大きな影響を与えたことは、想像に難くない。そして彼が帰国した年の8月、先述のように『社会学界』の第9巻が、ラドクリフ-ブラウン特輯号として出版された。本号には呉文藻によるラドクリフ-ブラウンの業績の紹介のほか、ラドクリフ-ブラウンの「社会科学における機能の概念について」「人類学研究の現状」の二本の論文も翻訳されている。また、本号には、後にフリードマンのリニージ・モデルに影響を与えることとなる、林耀華の「從人類学的觀點考察中國宗族鄉村」も掲載されている。『社会学界』には英文のタイトルも付されており、これによるとラドクリフ-ブラウンの建議の英語のタイトルは、"Proposals For a Sociological Survey of Village Life in China"となっている。呉文藻によると、これは大学で行われた講義の一つで、初めに『北京晨報』の副刊『社会研究』第116期に掲載され、『社会学界』に再録されることになった。

東アジアにおけるコミュニティー・スタディーズ

ラドクリフ-ブラウンも講演の中で述べているように、当時、アメリカの大学においてコミュニティー・スタディーズを提唱し、実行していたのは、ハーバード大学のロイド・ワーナー教授のほか、シカゴ大学の人類学部のスタッフであった、ラドクリフ-ブラウン教授のほか、フェイ・クーパー・コール教授、ロバート・レッドフィールド教授などであった。

エンブリーの *Suye Mura* (1939) に寄せた、ラドクリフ-ブラウンの序文によると、両大学のスタッフによって、シリヤ、メキシコ、マサチュ

ーセツツ、ミシシッピー、アイルランド、ケベックなどで、コミュニティー・スタディーズが行われていたが、1935年に、この種の調査をアジア東部まで拡大することが決定され、エンブリーの日本での調査は、その一環であったという^(註4)。

シカゴ大学の大学院生であったエンブリーが日本に赴いたのが1935年の8月、ラドクリフ-ブラウンが北京に赴いたのも同年の10月であるから、ラドクリフ-ブラウンは、日本での調査と平行して、中国での調査をもくろんでいたことは想像に難くない。実際、ラドクリフ-ブラウンが講演の中で展開している、社会生活の体系的記述を重ね、社会構造の比較研究を通して、自然科学のように一般法則を導き出すという自説は、先の序文のなかでも、改めて述べられている。従って、彼が中国からの帰途、日本に立ち寄ったのも深い意味があったわけである。

その後、ラドクリフ-ブラウンはオックスフォード大学に移るが、それは大西洋を越えて、さらにコミュニティー・スタディーズの普及・拡大を意図したものであった。ラドクリフ-ブラウンに次いで、ファースが中国行きを準備していたのは、こうした背景があった。

ピアズレーは、*Suye Mura*の1964年版への前書きのなかで、今日でこそ、コミュニティー・スタディーズはどの地域においても珍しいものではなくなったが、1935年当時は、ごく僅かな人々しかこの方向を目指していなかったとしている。また、コミュニティー・スタディーズがシカゴ大学の人々を熱狂させた理由の一つは、当時のシカゴ大学において、社会学と人類学との関係が非常に近く、ほとんど相互依存に近い関係にあったからである、との重要な指摘を行っている^(註5)。社会学と人類学との相互接近は、燕京大学をはじめ、当時の中国の学界においてもみられが、これはアメリカの影響であったことが考えられる。

ラドクリフ-ブラウンの中国訪問は、呉文藻の招聘によって実現したわけであるが、ラドクリフ-ブラウンの方からの強い意向もあったものと想像される。最終的に、日中戦争によってラドクリフ-ブラウンやファース

らのもくろみは頓挫することとなったが、彼の蒔いた種は、間接的にではあるが、費孝通の *Peasant Life in China* (1939) となって結実したといえよう^(註6)。こうして、エンブリーと費孝通の民族誌は、東アジア地域における最初のコミュニティー・スタディーズの成果となったわけである。1930年代以降に刊行された東アジアの民族誌は、ラドクリフ-ブラウンがもくろんでいたような比較研究を行うには、十分な蓄積を積むことができなかつたが、今日、それらは当時の社会状況を伝える貴重な歴史的資料としての価値を加え、今日まで読み継がれることとなった。

二つの建議とその後の中国における展開

民族誌の科学性、客観性なるものが問われ、民族誌はむしろ調査者個人の世界観が反映された、個人的な「作品」である、という考えに移行しつつある今日の情況からすると、ラドクリフ-ブラウンの議論には、自然科学との比喩に見られるように、民族誌の科学性を信じて疑わぬ姿勢が、確かにうかがえる。しかし、これは彼らが人類学を社会科学の一分野として確立させようと、必死に努力していた時期の議論であり、我々としてはそれを楽観的にすぎると批判するのではなく、むしろその根底にある情熱を継承すべきではないだろうか。

一方、ファースの建議は、コミュニティー・スタディーズの方法論のみならず、歴史学や歴史文献の問題などに議論を展開している。おそらくファースは、呉文藻を経由するなどして、何らかの形でラドクリフ-ブラウンの建議を知ったうえで書いたものと思われる。建議のタイトルが示すとおり、ファースの視点は農村社会の研究を基礎として、中国農村の社会構造の解明に向けられている。ラドクリフ-ブラウンも社会変化の問題について言及はしているが、ファースはより具体的に、西洋文化の影響による社会変化の問題に注目している。また、関連する英文や中文の文献に当たっており、彼が中国でのフィールド・ワークを準備中であったことをうかがわせる。

しかしながら、その後、日本の中国侵略という歴史的な事情により、彼らの建議が十分に展開されなかつたのは、中国研究にとっても、人類学にとっても残念なことであった。その後、1954年、中国本土での調査研究が停止した段階で、フリードは民国期の代表的な英文民族誌のレビューを行っている^(註7)。彼は、各民族誌が隣接関連分野の面において相互の関連が少ないと、史的アプローチがまだ十分にとられていないことなどを指摘し、中国社会を研究するうえでコミュニティー・スタディーズは万能ではなく、他の方法と併用されるべき一つの方法に過ぎないとしている。しかし、フリードは中国語による民族誌、例えば燕京大学社会学系の学生らによる学位論文などを考慮に入れていないため、必ずしも全体像をふまえた批評とはなっていない。

フリードマンも1963年に同様のレビューを行っているが^(註8)、コミュニティー・スタディーズに対してはより批判的となつてゐる。費孝通の研究対象に対しても、村の狭い範囲に限定されすぎているとし、ラドクリフ-ブラウンの建議に対しても、郷村レベルのコミュニティー・スタディーズから始めて、それらの比較研究を通して一般化していくという考え方は、人類学的な誤謬であるとさえ言い切つてゐる。この点は先の拙稿でも触れているとおり、フリードマンはラドクリフ-ブラウンの講義録を誤読しているように思える。フリードマンのこうした強気の発言の背景には、彼自身による華南におけるリニージ・モデルの提示があつた^(註9)。

確かに、フリードマンのリニージ研究や、スキナーの市場圏研究のように、村レベルを超えたモデル化も、必要不可欠である^(註10)。しかしその一方で、こと中国本土に関しては、コミュニティー・スタディーズの限界を論じるには、あまりにそのコミュニティー・スタディーズが行われていないのである。中国本土でも民国期の情熱が維持され、優秀な人材が各地で調査研究を行つていれば、新たな方法論や統合理論の模索を含む、新しい展開が起こり得たことは間違ひない。

改革以降、中国本土でも調査研究が再開されたが、その後の理論的な展

開を受け入れつつも、なお、未完の作業を行うべき情況が残されている。費孝通にしても、1948年に出版した『郷土中国』は、コミュニティー・スタディーズを發展させたものとして自ら位置づけているし、彼の問題意識は、30年近い中断を経て、小城鎮研究として展開されている^(註11)。費孝通は、中国の社会学・人類学の再建にも力をつくし、多くの後継者を育ててきた。各地で再開されたコミュニティー・スタディーズは活況を呈し、1996年には、費孝通の学術活動60周年を記念した論文集、『社区研究與社會發展』が出版されるに到っている^(註12)。

こうした情況にあって、コミュニティー・スタディーズを出発点として、そこを拠点としてより広い範囲へ研究を拡大していくことを提案し、また歴史との関係についても社会学者ならではの鋭い指摘を行っている、ラドクリフ-ブラウンとファースの二つの建議は、今日でもまだ、決してその価値を失ってはいない。

註

- (註 1) 東京大学東洋文化研究所が第6、7巻、東洋文庫が第1～3、6、7巻、京都大学図書館及び人文科学研究所が1～3巻、天理大学図書館が第1巻、山口大学図書館が第2巻所蔵となっている。従って、第9、10巻は日本には一冊も入ってきていないことになる。私自身も南京大学留学中に、図書館で第9巻をなんとか複写することができたが、第10巻は南京大学図書館でも欠本となっていたため、北京大学の図書館まで足を運んだ。当時は解放前の雑誌類は複写もさせてもらえず、交渉の末、後日カメラを携えて、なんとか写真撮影を許可された。
- (註 2) 西澤治彦1988「漢族研究の歩み—中国本土と香港・台湾」「文化人類学」5号アカデミア出版会。なお、中国社会学・人類学に関しては、その後、改めて短いレビューを書いている（「研究の流れ—漢族」未成道男編『中国文化人類学文献解題』東京大学出版会1995）。
- (註 3) Chien Chiao "Radcliffe-Brown in China" *Anthropology Today* 3 - 2, 1987
- (註 4) John F. Embree 1939 *Suye Mura: a Japanese Village* University of Chicago Press (邦訳については、ラドクリフ-ブラウンの建議訳の、邦訳註3を参照)
- (註 5) Richard Beardsley 1964 'Forward to the 1964 Impression' in *Suye Mura: a Japanese Village* Chicago University Press 1972
- (註 6) Fei Hsiao-tung 1939 *Peasant Life in China* Routledge and Kegan Paul (市希木亮訳『支那の農民生活』教材社1939／仙波泰雄・塩谷安夫訳『支那の農民生活』生活社1940)

なお、費孝通への影響を間接的としたのは、彼は当時、調査にでかけていて、ラドクリフ-ブラウンの講義は、直接聞いていないからである。この点に関しては、中国社会学史に関する別稿（執筆中）に譲りたい。

- (註7) Morton Fried "Community studies in China" *Far Eastern Quarterly* 14- 1
- (註8) Maurice Freedman "A Chinese Phase in Social Anthropology" *British Journal of Sociology* 14- 1 (末成道男訳で「社会人類学における中国研究の位置」と題し、『東南中国の宗族組織』に収録)
- (註9) Maurice Freedman 1958 *Lineage Organization in Southeastern China* The Athlone Press (末成道男・西澤治彦・小熊誠訳『東南中国の宗族組織』弘文堂1991)／1966 *Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung* The Athlone Press (田村克己・瀬川昌久訳『中国の社会と宗族』弘文堂1987)
- (註10) William Skinner 1964, 1965 "Marketing and Social Structure in Rural China" *Journal of Asian Studies* 24- 1, 2, 3. 本三論文は発表後もなく、斯波義信によって詳細な紹介がなされたが（『東洋学報』49），その後、全文が邦訳された（中村哲夫ほか訳『中国の農村市場・社会構造』法律文化社1971）。
- スキナーの市場圈研究は、その後、さらに都市研究へと展開し、1977 *Cities in Late Imperial China* Stanford University Press を編集している。本書のうち、スキナーの二本の論文が邦訳、出版されている（今井清一訳『中国王朝末期の都市』晃洋書房1989）。
- (註11) 費孝通1948「後記」『郷土中国』観察社。小城鎮研究の最初の論考は、『小城鎮大問題』（江蘇人民出版社1984）に収められている。これらを含めた、その後の関連論文は、日本で編訳が刊行されている（大里浩秋・並木頼寿訳『江南農村の工業化』研文出版1988）。
- (註12) 潘乃谷・馬戒主編1996『社區研究與社會發展—記念費孝通教授學術活動60周年文集』（上中下）天津人民出版社

〔凡例〕

呉文藻の中国語訳は、ラドクリフ-ブラウンの英語の講演を中国語に翻訳したものであるが、内容の構成からいって、講義原稿を訳したのではなく、口述されたものを記録し、それを整理、翻訳したようである。ラドクリフ-ブラウンの直筆の講義原稿が存在しないとは断言できないが、その可能性は薄いように思われる。ファースの建議の方は、明らかに送られてきた完成論文を翻訳しており、両者を読み比べてみると、ラドクリフ-ブラウンの建議が、講義録である点がよけいに目立つ。

このように、ラドクリフ-ブラウンの建議の方は、英語の講義を中国語

に、しかも文語の中国語にしているため、中国語の訳文は決して読みやすいとはいえない。また内容も理論的で、抽象的な議論を行っているため、さらに分かりにくくなっている。従って、日本語訳に際しては、ラドクリフ-ブラウンの意図をくみ取りながら、必要に応じて意訳を行った。講義録の編訳を直訳しても意味がないからである。

ファースの方は、完成原稿を費孝通が翻訳したものであるが、こちらの方も抽象的な議論が格調高い文語に訳されているため、決して読みやすいものとはなっていない。ここでも必要に応じて意訳を行っている。ファースのオリジナル原稿が残されているか否かは不明である。

なお、両論文とも、中国語訳にある英語の単語はそのまま付した。ラドクリフ-ブラウンの論文では、中国語訳文にある英単語を（ ）でくくり、もとの英単語を推測した場合には〔 〕で表示した。邦訳の際に訳者が補った語句も〔 〕でくくった。また、中国語訳文の「訳者註」を「呉文藻註」とし、日本語訳の際の訳註は「邦訳註」とした。ファースの論文においては、中国語訳文にある（ ）はそのまま（ ）で表記し、邦訳の際に訳者が補った語句は〔 〕でくくった。また註は、ファース自身が註をつけたと思われるので、それを「原註」とし、日本語訳の際の訳注を「邦訳註」とした。原註は脚註となっているが、邦訳では通し番号とした。

邦訳に際し、中国語訳文の意味不明瞭な箇所は、武藏大学非常勤講師の劉正愛氏にご教示いただいた。また、邦訳註で紹介した欧文文献は、国内では学術情報センター Webcat のほか、1999年の9月にカリフォルニア大学を訪ねた際、図書館でリサーチを行った。

なお、文末に付した中国語訳の原文は、字体も含めオリジナルの文章を一字一句、忠実に再現している。例えば、同一文章内で教と敎、只と祇などの異体字が混用されていたり、鄰などの本字や場などの俗字が使われたりしているが、敢えてそのままとした。但し、一行あたりの字数はオリジナルの文章と異なる。また、英単語の誤植(Mississipi)もそのままとした。

中国郷村生活の社会学的調査に対する建議

ラドクリフ-ブラウン講演
呉文藻編訳

多年来、人々があまねく知ることとなった「社会調査」〔social survey〕は、すでに世界各地で提唱され、中国もこうした風潮の影響をすでに受けている。私は、各位に意見を述べさせていただき、これとは異なるもう一つの研究の可能性について指摘したい。この種の研究を私は「社会学的調査」〔sociological survey〕と名づけたい。一般的にいって、社会調査はある一つの集団社会の生活の見聞を蒐集するだけであるのに対し、社会学的調査、あるいは研究は、ある一部分の事実の考察に依拠して、一群の社会学理論、もしくは「作業仮説」〔working hypothesis〕を検証するものである。この簡単な区別からして、社会学的調査が普通の社会調査とはその目的と方法において違うことが理解できよう。社会学的調査は、社会人類学のフィールド・ワーカーによる、「消滅しつつある文化」に残存する土着民族の単純な社会〔simple society〕の研究の経験から発展したものである。彼らはフィールド経験の結果から、ある種の社会研究の方法を確立していく。近年来、人類学の訓練を受けた学生が同様の方法を応用して、比較的進歩した社会の地域コミュニティー〔local community〕すでに研究を始めている。例えば、Charlotte Gower 博士によるシリー島の小さな町^(邦訳註1)、Lloyd Warner 教授の指導するハーバード大学の学生による Connecticut 州の Newburyport、および Mississippi 州の Natchez などにおける調査^(邦訳註2)がある。これらの研究の成果はいずれもまだ発表されていないが、間もなくみることができよう。この他にも、ハーバード大学がアイルランドのクレア州 County Clare の一部で行っている、似たような研究がある。シカゴ大学（ラドクリフ-ブラウン教授の指導のもとで—呉文

藻註)も、日本の九州熊本県の熊郡六工村で、目下、調査を行っているところである(九州の熊本地方は日本文化の発祥の地で、西洋文化との接触も少なく、固有の文物制度が完全に保存されているため、日本の農村生活を研究する上で代表的なコミュニティーとして選ばれた—呉文藻註)^(邦訳注3)

我々の中の一部の人は、世界中の多くの異なる地域で同様の調査を行うことが出きれば、必ずや「比較社会学」[comparative sociology]にとって、大きな科学的価値がもたらされるであろうと信じている。同時に、研究対象としている社会に対しても、従来の社会調査の方法では到達することのできない、ある種の「内察」を提供してくれると信じている。このためには、多数の研究者の協力と、世界各地で行われている研究の連携が必要となつてこよう。

科学研究において、方法論は常に理論、あるいは仮説によって決定する。(ホワイトヘッド著の『思想的探検』283~287頁を参照、部分訳は附註を見よ)^(邦訳註4)ところで、全ての観察というのは常に興味によって左右される。もし我々の興味が実用的なものにあれば、我々の観察もまた、理論科学にとって極めて小さな価値か、全く価値がなく、実際の問題において価値のあるものにだけ向けられる。これに反し、もし我々の興味が純粹に理論的なものであれば(ちょうど「数理物理学者」や生物学者など、純粹学者の興味のように)、且つ、我々の研究が「現象の新しい理論的知識」をもたらすものであれば、こうした新知識は、実際に〔純粹理論に〕興味を持っている人にとって、重要な意味を持ってくる。故に、観察が科学と合致するのを求めるならば、必ず一つの理論、あるいは「作業仮説」によって導かれる必要がある。一つの方法論の価値は(方法論から得られた理論的な価値と実際的な価値の両方を指す)、それが依拠している理論がどうであるか、またそれが事実と適合する妥当性があるかどうかをみなければならない。

私が採用した、すでに応用を試み、[調査]研究においても実験済みの

仮説を陳述するならば、以下のようになろう。

(一) ある特定のコミュニティーの社会生活の各方面は、相互に密接に関連しており、一つの統一的な整体を成していると同時に、体系の各部分をも成している。どの方面であろうと、その部分とその他の全ての部分との関係を研究しない限り、正しく明瞭にすることはできない。従って、ある村落の経済生活は、それと家族あるいは宗族組織、宗教、および「社会的制裁」(social sanctions) 制度などとの相互関係を考慮にいれなければ、完全に明瞭にすることはできない。それ故、あらゆる社会活動は全てある種の機能 [function] を持つており、しかもその機能を発見してはじめて、その活動の意義を了解することができる、といえよう。どの活動の機能でも、どの風俗あるいは信仰の機能でも、コミュニティーを一つの統一的な体系とみなし、この総体的な社会生活におけるそれらの地位を定める必要がある。

(二) あるコミュニティーの社会生活の基礎とは、ある特定の「社会構造」[social structure] であり、また各個人が連合して一つの集団を成している社会関係である。それ故、社会の連續性 [continuity]、社会生活の連續性は、社会構造の連續性に依拠しているのである。

(三) 社会的機能と社会構造という二つの概念は、「社会体系」[social system] という一つの概念に統合することができる。この概念は二つの側面を内包しており、一つは外界への適応 adaptation で、社会体系とは、一定数の人類が住むある特定の自然環境において、物質の需要を提供しているある種の機構といえる。もう一つの側面は、「統合」(integration) で、社会体系とは個人の利益の調和に依拠しながら、連合や調整を行い、人類を一つの総体として結びつけている。社会構造とはこの統合の産物であり、あるいはまた社会構造そのものがこの統合ともいえよう。どのような社会活動の機能も、適応や統合における、それら〔即ち構造〕の貢献なのである。

このように、私が引用した方法〔論〕は、次のように規定することがで

きる。即ち、コミュニティを体系とみなす研究には、適応と統合の二つの側面が含まれる。

最近まで、この種の研究方法は、オーストラリア・メラネシア・アフリカの土着の部落など、比較的未開の小規模で隔離されたコミュニティにおいて、応用されるに過ぎなかった。この種のコミュニティの社会生活は、一人のフィールド・ワーカーでも、その統合的な研究を行うことが可能であるが、同様の方法をアメリカや中国など、比較的大きく複雑な社会で応用しようとすると、多くの困難がともなう。この種の社会は、多数の比較的小さなコミュニティが相互に関連しあって、一つの集合体を成しているととらえる必要がある。即ち、中国であれば、省・県・鎮・村・そして最小の単位である「戸」から成る集合体であるといえよう。従って、我々の研究は、最小の単位である「戸」から開始し、ここから全国に拡大していく必要がある。さらには全世界にまで拡大していく必要がある。というのは、中国もまた世界というコミュニティの一部分を成しているからである。

中国を研究する際、始めるのに最も適當な単位は郷村である。というのは、大部分の中国人はいづれも郷村部に住んでいるし、また郷村は、一人か二人のフィールド・ワーカーが、一二年のうちに精緻な研究を完成させるのに十分に小さなコミュニティでもあるからである。

完全なる郷村コミュニティの研究には、三つの異なる研究が含まれているが、これらは互いに関連してもいる。

甲—共時的、あるいは同時代の研究 (synchronic or monochronic study) (即ち、いわゆる「静態研究」—呉文藻註) で、ある特定の期間内における、あるコミュニティの内部構造や生活を研究するもので、過去の歴史、あるいは現在進行中の社会変化には触れない。

乙—郷村コミュニティの外部との関係の研究で、そのコミュニティとその他のさまざまなコミュニティとの外部関係、およびそのコミュニティと比較的大きなコミュニティとの外部関係を研究する。というの

は、そのコミュニティーも比較的大きなコミュニティーの一部分を構成しているからである。

丙一通時的研究、あるいは連続性の研究 (diachronic study) (即ち、いわゆる「動態研究」—呉文藻註) で、内部構造と外部関係における、過去の、および現在進行中の社会変化の研究を行う。

以上の三つの研究は、フィールド・ワーカーがそれぞれの違いを明確に理解していれば、自らの判断で同時に進行しても構わない。

こうした方法を用いて、ある郷村社会の共時的な研究を行うには、先ず、その全体の内部構造や、各個人間の各種の社会関係を見つけだし、記録する必要がある。

第一に、郷村は一つの近隣集団^(邦訳註5)からなる。もちろん、大きな郷村には、村内をさらにいくつかの小さな近隣集団に分けることができるものもある。第二に、郷村は「戸」^(邦訳註6)の集体であり、各戸内の構成要員を連結している社会的紐帶こそが家族、あるいは親族である。但し、親族の紐帶はさらに、異なる郷村や、異なる戸の構成要員をも連結しうるものである。時には、華南の单姓村のように、村全体が一つの親族集団からなることもある。コミュニティー内の全ての構成要員の血縁関係は、社会構造において極めて重要な部分となっており、調査を行う必要がある。こうした研究において、リバース博士 W.H.R. Rivers が先に考え出した、族譜調査の方法と、地図上に住居の位置をプロットしていく方法を、応用することができる。この方法は有用であるが、主要なものではない。戸の組織以外に、通常はさらに氏族、あるいは父系親族^(邦訳註7)の組織がある。これらの村内の親族団体もまた、社会構造の一部分をなしており、調査が必要である。

一般に、郷村組織と特殊な目的をもった組織（例えば青苗会、廟会、行会など）とは、共に社会構造の重要な要素を成している。目的を持った組織には秘密結社も存在する。これは当然、容易に研究できる組織ではないが、研究の遂行を妨げてはならない。

最後に、社会構造においてもう一つ重要な側面は、社会生活における個人の役割の、さまざまな分業である。第一の、そして最も基本的な分化は、「性別」と「年齢」に基づくものである。この他にも、職業、および社会的な地位の分化もある。言うまでもなく、社会的地位は、個人の品位、財産、経済環境、あるいは指導者としての能力などに起因する。ここで建議している方法〔論〕は、社会生活のさまざまな方面と社会構造全体との関係を研究しようとするものである。それゆえ、このような分けられた研究は、全く一種の方便に過ぎない。いくつかの個別な研究テーマを列挙することは可能であるが、ここで提議している方法〔論〕の中心的な特徴に重点をおくことを忘れてはならない。則ち、どのような個別なテーマを研究する場合であれ、必ず社会生活全体を心の中にとどめておく必要がある。従って、我々は、ある郷村の経済生活あるいは宗教生活を研究するのではなく、郷村生活全体における経済方面あるいは宗教方面こそを研究しなければならない。家族と家族関係は、中国、とりわけ中国の郷村部において、最も重要である。社会構造が大綱を決定している以上、郷村の研究を始めるのに最も良い方法は、社会生活を一つの全体とみなし、家族や宗族、親族などがその中で果たしている機能を考察することである。この種の研究は、当然、経済生活や土地所有権、および社会生活におけるさまざまな要素への考慮も含む。

技術制度もまた、一つの特別な考察のテーマとなり得る。それは、日常生活において製作されたり応用されたりする各種の事物の研究を含む。例えば、耕作や建築の技術、および技術活動が拠り所とする各種の技巧や知識などがそれである。

経済生活の研究は、当然、技術制度や家族と親族の機能、およびコミュニティーの外部との関係の認識などを含む。もう一つ、専門に研究すべき重要なテーマは、個人の行為を規制する際に「社会的制裁」が果たす機能についてである。それ故、ただ単に犯罪を研究するのではなく意味がなく、同時に、行為を規制する世論や宗教、および倫理教育などの効果も研究す

る必要がある。礼節と儀礼は、個別に研究する必要がある。その際には、それらと生誕、婚姻、葬儀、祭祀などとの関係、およびそれらと特殊な宗教的崇拜との関係などにも注意を払う必要がある。儀礼の意義をめぐる解釈は、それ自体、非常に難しい問題である。この種の研究は、いくつかの緻密な〔フィールド〕研究に、歴史的文献を参照して初めて成し遂げることができる。この点、および関連する社会生活のその他のさまざまな側面については、社会生活の通年のリズム、およびそれと季節の変遷における自然現象との相関関係について、子細に観察する必要がある。

一つの極めて重要なテーマは、文化あるいは教育の研究、即ち、一個人の社会化過程の研究である。青年時代から、どのように知識や技術、品格、および一切の行為や思想と感情の習慣を獲得し、社会生活においてどのような地位に適合していくか、という研究である。正規の学校教育はこの過程において小さな部分を占めるに過ぎず、我々は一個人の社会化の全過程を考察する必要がある。

広義の教育や「社会的制裁」と関連するテーマに、個人が自分の住む社会環境に対して作り出した適応の種類とその程度の問題がある。この種の題材の系統的な研究は、「個人心理学」と呼ぶことができよう。このテーマは、精神病学者のほか、教育や社会事業に従事する人々らが、常に重大な関心をよせるものである。最期に、目下のところ、未だに厳格な科学的研究が十分になされていないテーマを挙げたい。即ち、各個人の行為を導いたり操作している思想や情操に対する、系統的な研究である。これらの思想や情操は、文化や文明の特質に由来する。そしてこの特質とは、その文化の「民族精神」(ethos) である。それ故、中国と欧洲とで価値觀念と信仰、あるいは思想制度が全く異なるだけでなく、中国国内にも、農村と都市や、地域によって差違が存在する。この種の研究は、社会生活の全ての方面に対する広範な知識がないと、研究を進めることができない。

一つの郷村コミュニティーの「外部関係」は、如何なる社会生活の研究においても、必ずフィールド・ワーカーの注意を引くものである。但し、

我々の研究計画によれば、郷村を一つの独立した研究単位とはしているものの、その村の全ての外部関係に対しても特に研究を行うものである。即ち、全体からこれらの外部関係を研究し、またそれが内部の社会生活に占める地位を観察する。我々は、この方法を応用して初めて、研究するコミュニティーの相対的な独立の度合いや隔離の度合いを決定することができるとしている。

ここで我々はしばらく外部関係の研究から離れて、連続性、即ち社会変遷の研究について論じたい。「変遷」を観察する最も正確な方法は、過去に研究された郷村を、ある年限のうちに繰り返し観察することである。これは一つの理想的な方法であるが、応用するのは極めて難しい。近年、シカゴ大学の人類学部がこの方面において実験的研究を行っている。Fred Eggan 博士は新たに一年近くを費やして、あるフィリッピンの部落の現状を研究しているが、そこは二〇年前に、Fay-Cooper Cole 博士が緻密な研究を行った部落^(邦訳註8)である。Eggan 博士は、過去二〇年間に発生した全ての変化、とりわけその部落がアメリカとの文化接触以降に発生した変化を中心に、観察している。ある時期における、あるコミュニティーの研究は、現在まさに進行中の社会変遷の本質の究明に対して、いくつかの手がかりを提供してくれる。老人に対しては、彼ら自身が体験した変遷を聞き出すことができる。但し、彼らの陳述は慎重に扱う必要があり、厳格な批判的方法でもって真実のみを採用する必要がある。

間接的でない方法を用いて、あるコミュニティーの外部との接触によって発生した社会変遷を観察する場合、同じ影響を受けながらもその程度が異なる、他のコミュニティーをいくつか選んで研究に加えると良い。例えば、R. Redfield 博士は、まさにメキシコにおいていくつかのコミュニティーの緻密な研究を指導しているが^(邦訳註9)、それらには現代文明との接触が極めて少なく、且つ未開で隔離されたマヤインディアン (Maya Indians) から、多くの中間的なコミュニティー、そして現代文明の影響を顕著に受けている小都市までが含まれている。この方法を用いて博士は、僅かしかス

ペインの影響を受けていないマヤの「民俗文化」から、近代メキシコの都市文化に至るまでの変遷を、研究できるようにした。A.I.Richards 博士もアフリカの北ローデシア (Northern Rhodesia) のある部落の中から、三つのコミュニティーを選び、類似の研究を行っている^(邦訳註10)。その目的は、これらのコミュニティーにおける、ヨーロッパ文明との接触後に発生した変遷を観察することにある。

最期に、この種の研究の目的であるが、我々が期待する成果は以下のようなものである。

(一) これらの研究は皆、理論的な「人類社会の科学」に対する貢献となるものである。それらは社会科学における、物理科学の実験の位置に相当する。理論社会学上のさまざまな仮説は、特殊な例証や具体的な事実を収集することによって、検証することができる。全ての社会において科学の進歩は、比較方法の応用に依拠するものである。それ故、我々は可能な限り、「異なる形式の社会」の緻密な研究を精力的に行う必要がある。現在の中国社会を研究するに際しては、過去の中国社会や欧米社会と比較するだけでなく、同時にまた未開民俗の単純な社会とも比較をする必要がある。

(二) この種の研究は、特定の特殊なコミュニティー、即ち研究対象と同じ地域内の類似のコミュニティーに対し、より深い理解を提供するものである。この種の了解は実際的な価値を有しており、社会の改革運動やソーシャル・ワーカーらに、「学んだものを実際に役立てる」という、健全な基礎を提供するものである。我々は以下のように主張することができよう。上述の如くこの種の研究は、実際の仕事、即ち実際問題のみを重視し、社会の普通の理論的研究には触れないものに対して、よりよい指導を行い得るものである。現在はまだ実現していないにしても、将来必ずこのようになるであろう。この種の主張は、社会人類学がニューギニアおよびアフリカにおいて得た成果の応用によって成立している。物理科学において、自然界の力を制御し応用するうえで最も重要な知識は、純理論的な研究から

得られたものである。それ故、社会科学の理論的な発展は、我々に社会的な力を制御するうえでの知識を与えてくれよう。

(三) 現存する社会に対し緻密な研究をすることは、さらに徹底的で系統的な認識をもたらしうる。即ち、過去の社会に対しても、さらに一步進んだ理解を得ることができる。歴史学者は、過去を知ることは現在を了解することである、とよく唱える。これに反し、社会学者の立場からみると、現在を了解することは過去を知る手助けとなる、と言うこともできる。これはとりわけ、社会の連続性が数千年にもおよぶ中国において、なおさら確かなことである。

附註：懷第黒著『思想的冒險』*Adventures of Ideas* 283頁から267頁(287の誤植)。

「この理論と方法との密接な関係は、部分的には、論拠の適合性は議論の中心的な理論による、という事実に基づく。この事実こそが、中心的な理論が『作業仮説』と呼ばれる理由である」(283頁「理論指定方法」の章より／原書220頁)

「哲学的思想の混乱のほとんどは、論拠の適合性は理論によって定められるという事実を、忘却することから生じる。…このことはまた、応用を視野に入れた理論の構築に失敗した科学が、必然的に進歩が遅くなる理由となっている。それでは何を探求しているのかも分からぬし、散發的な観察をどのように関連づけたらいいのかも分からぬ」(284頁／原書221頁)

「全ての方法は幸運な単純化といえよう。しかし、一つの方法では、同じようなタイプの事実しか考察できないし、方法によって定められた用語でしか表明できない。何故なら、全ての単純化は過度の単純化であると言えるからである」(285頁／原書221頁)

「方法論とは、材料や論拠の扱い方である」(287頁／原書223頁)

註

- (邦訳註1) Chapman Charlotte Gower (1902-?)。ラドクリフ-ブラウンが指している研究は, *Milocca, a Sicilian Village* Cambridge, Schenkman Pub.Co. 1971と思われる。彼のその他の著作としては, *The Northern and Southern Affiliations of Antillean Culture* Menasha, Wis./Pub. for the American Anthropological Association 1927がある。
- (邦訳註2) William Lloyd Warner (1898-1970)。ラドクリフ-ブラウンが指している研究は, *Deep South: a Social Anthropological Study of Caste and Class* written by Allison Davis, Burleigh B.Gardner and Mary R.Gardner, directed by W.Lloyd Warner Chicago:University of Chicago Press 1941と思われる。
- ワーナー自身の著作は、人類学的なオーストラリア研究から始まって、アメリカ社会のコミュニティー・スタディーズ、階級、犯罪、民族問題、企業研究など多岐に渡る。代表的なものを列挙すると、*The Social Life of a Modern Community* (with Paul S. Lunt) New Haven:Yale University Press 1941, *The Social System of American Ethnic Groups* (with Leo Srole) New Haven:Yale University Press 1949, *American Life: Dream and Reality* Chicago: University of Chicago Press 1953, *Industrial Man* London: Oxford University Press 1959, *Big Business Leaders in America* (with James C. Abegglen) 1955, *A black Civilization: a Social Study of an Australian Tribe* New York:Harper 1958, *Social life of a Modern Community* New Haven: Yale University Press 1959, *The Social System of the Modern Factory, the Strike: a Social Analysis* New Haven: Yale University Press 1959, などがある。このうち、*Big Business Leaders in America* は、『大企業の指導者たち』と題して邦訳されている（ダイヤモンド社1958）。
- (邦訳註3) 熊本県での調査とは、日本でもよく知られている、John F. Embree 1939 *Suye Mura: a Japanese Village*, University of Chicago Press (植村元覚訳 1955『日本の村落社会：須恵村』関書院／1978『日本の村－須恵村』日本経済評論社) を指している。当時、エンブリーはシカゴ大学の大学院生で、シカゴ大学人類学部のスタッフであった、ラドクリフ-ブラウン教授の指導のもと、1935年8月～36年12月にかけて、調査研究を行い、本書を完成させた。
- なお、呉文藻の訳註では、調査地を熊本県の熊郡六工村としているが、これは球磨郡の誤りであろう。同様に六工村も何らかの誤伝か、もしくは当初、須恵村の仮名として用いられたのかもしれない。
- (邦訳註4) 原著は、Alfred North Whitehead 1933 *Adventures of Ideas* Macmillan Company/Free Press。言及している頁は、この中国語の訳本のもの。この附註はラドクリフ-ブラウンのものではなく、呉文藻が翻訳の際に参考までにつけたものであろう。原書では、Chapter XV Philosophic Method の部分にあたる。引用文の邦訳に際しては原著の英文を参考にした。
- (邦訳註5) 原文は「隣里群」で、これは呉文藻による造語と思われる。英文は文脈から推測して、neighborhood communityと思われ、邦訳では近隣集団という訳語をあてた。人間関係ではなく、家屋の物理的なレイアウトに焦点を合わせれば、集落と訳し

てもいいかもしれない。

- (邦訳註6) 「戸」とは、一人の家長を頂点とし、共に生活している一つの家族、およびその住居を指す。後者のほうに力点を置いた場合、英語のコンパウンドがこれに相当する。核家族からなる小さな戸もあれば、兄弟が分家をせずに共に暮らしている、拡大家族からなる大きな戸もある。要はその規模に関わりなく、経済を共にしている単位で、従って納税や戸籍の単位となる。
- (邦訳註7) 中国語訳の「氏族」の原文は、clan であろうが、「家系的組織」の原文は lineage もしくは、decent group と思われる。邦訳では後者を「家系」とは直訳せず、「父系親族組織」と意訳した。
- (邦訳註8) Fred Eggan は *Social Anthropology of North American Tribes*, 1955 University of Chicago Press など、アメリカン・インディアンの研究で知られるが、フィリピン関係では、*Filipino popular tales, collected and edited with comparative notes by Dean S. Fansler, foreword by Fred Eggan, Folklore Association*, 1965がある。しかしこれはコミュニティー研究ではないし、出版の年代も遅い。当時の調査を単行本として刊行したのかどうかは不明。
Fay-Cooper Cole による20年前の綿密な調査というのは、出版年代から判断して、*Chinese Potter in the Philippines*, Field Museum of Natural History, 1912と思われるが、これは考古学的な調査報告である。
- (邦訳註9) Robert Redfield は多くの民族誌や研究書を執筆しているが、ここでラドクリフ・ブラウンが指しているのは、*Iepoztlan, A Mexican Village: a Study of Folk Life*, University of Chicago Press, 1930、および *Chan Kom: a Maya Village*, by Robert Redfield and Alfonso Villa R. Carnegie Institution of Washington, 1934、と思われる。なお、レッドフィールドは、中国関係では、夫婦で *China's Gentry: Essays in Rural-Urban Relations* by Hsiao-tung Fei (費孝通) University of Chicago Press, 1953の編集を行い、序文を寄せている。
- (邦訳註10) Audrey I. Richards の調査研究とは、*Hunger and Work in a Savage Tribe: a Functional Study of Nutrition among the Southern Bantu*, Geoge Routledge & Sons, 1932、及び *Land, Labour and Diet in Northern Rhodesia: an Economic Study of the Bemba Tribe*, Oxford University Press, 1939を指していると思われる。

中国農村社会の団結性の研究——一つの方法論の建議

レイモンド・ファース
費孝通訳

農村コミュニティーの研究は、中国農村社会学の焦点であると同時に基礎である。この作業の重要性はどんなに強調しても強調しすぎることはない。とりわけ現在においては。というのは、我々は、西洋文化や社会や政治の新思潮が中国農民に対して、一体どのような影響を与えているのか、及び各個人間の関係や集団の構造と活動にどのような変化をもたらしているのかを、直ちに知る必要があるからである。

農村コミュニティーの研究計画の骨子は、比較的小さな社会単位において詳細な研究を行い、一方においてその社会を統合し持続させている力を分析し、もう一方において社会に変化をもたらしている力を分析することである。一つの村を選んで研究の中心とし、親族の遠近、権力の分配、経済の組織、宗教の帰依、その他さまざまな社会的連係など、村人の相互間の関係を考察する。さらに、これらの社会関係が如何に相互に影響し、いかにコミュニティーの集団生活を総合的に規定しているかを観察する。この研究の中心から、親族系統、経済往来、社会合作などの回路を通じて、研究範囲を近隣の村落や市鎮にまで拡大していけばいい。これによって、我々は村落コミュニティーの自足の程度をみることができる。ここでいう自足とは、経済方面に限られるものではなく、その他のさまざまな社会的需要の満足も含まれる。

これらの問題を緻密に研究するに際しては、人類学者が用いてきた方法を用いるべきである。中には疑問を抱く人がいるかも知れない。人口も希薄で文字も欠如し、道具も粗末な単純社会において生み出された方法を、領土も広大で人文も悠久、道具も洗練され、宗教も複雑で哲理も深淵な中

国において、どの程度応用することが可能なのかと。もし一人の人類学者が、自らの独自の観点から中国を研究する場合、オセアニア^(邦訳註1)やアフリカの少数民族を研究するのと同じように^(邦訳註2)、一般に当地の文化に対して概観的な結論を出すことができ、「中国社会」の性質を総合的に説明することができよう。但し、地方の差異に関しては、十分に対応することができない。しかし、この地方の差異こそが、人類学者に貢献する機会を与えてくれる。例えば、福建にみられる宗族村落と華北にみられる非宗族村落との相違は、対外文化との接触の際にみられる反応においても、重要な差異となって現れることを提示している。個人間の関係の改組にしても、両地が同じ方向に向かうことはあり得ない。この点は非常に重要である。どのような農村改革の基本方案であれ、有効に実施するためには、先ず各地方の特性、実施した際の取得可能な効果^(邦訳註3)、避けることのできぬ抵抗などを、正確に認識する必要がある。目下のところ、我々は各省の村落や家庭組織の類型に対しては、大体に於いて相当の認識を得てはいるものの、緻密な方法でもってさらに研究を行えば、あるいは想像していなかったような多様な地方の特性を発見できるかも知れない。無論、科学的な概観を作ろうとするならば、現在の知識では、各種の類型間に正確な境界をひくには不十分である。類型の地域分布に関しても尚考察を待たねばならず、同じ類型の中でも、細部の差異については更に研究が必要である。これらの仕事を健全に発展させるためには、いわゆる「微視的な社会研究」(micro-sociological) でもって、すでにある「巨視的な社会研究」(macro-sociological) を補完する必要がある。且つ、すでになされてきた農業経済や信用、家庭収支などに関する詳細な研究を、社会関係の大綱に重ね合わせて考察すれば、さらに大きな意義や価値を見いだせるかも知れない。例えば、喬啓明と應廉耕が指摘しているように、河南、湖南、安徽、江西の農村での信用借款の最も重要な財源は、友人や親戚からで、前者は45%，後者は38%を占める（農民は金貸しに対する借款の字数を言いたがらないので、正確な統計は得難い）。通常の利息は、同族であれば、二分

五厘から四分二厘である^(原註1)。この種の信用制度が重要なのは、親族関係や友誼こそが経済的な互助の通路となっていることを明示しており、且つ、この種の金銭上の往来が決して商業的なものではなく、その他の社会的な連携の作用を受けていることを示しているからである。この種の借金は、通常の状況下では生産事業に対する投資に用いられることはなく、糧食の購入や婚葬の挙行のためのものである。我々は一歩進んで、債権者が、例えは彼が援助した儀礼に参加するとか、その他の社会的な服役を受けるなどの非経済的な報酬があるのかないのか、考察することができるし、さらに、親戚感情や友人間の友情が、どの程度、信用を得る上での基礎となっているかを観察することができよう。これらの事実を了解するためには、当地の婚姻や喪葬制度、親族や友情に働く道徳的圧力、人々の互恵関係に対する一般的な見解、および各種の債務返済を保証する制裁などについて分析する必要がある。ここにおいて、我々は「微視的な研究」の技術を使わないわけにはいかず、それによって各種の相関する社会状況における私人間の関係、及び各個人の実際の行為を考察する。

もう一つ、この種の緻密な研究を活用できる分野がある。中国には長期にわたって、家庭生活と親族の責任を記した書物の伝統があるため、中国人学者や中国について著す西洋の学者は、以下のような傾向がある。即ち、常に成文化された規範でもって社会制度を描写し、直接観察できる人々の実際の活動を無視してしまう。また常に、「士大夫」階級が如何にこれらの規範を賛賞し尊守したかに偏重し、これらの規範が一般の文盲の農民の実際の生活において、いかに作用したかを観察しようとはしない。例えは、陶履恭と梁宇臯の共著からなる書物において^(原註2)、我々はこの種の規範の下で、理想的な形態の親族や地方組織が、いかに順調に運営されていたかという情況を見ることができる。確かに、多くの地方はそうであるかも知れない。しかし、我々は時に、係争事件の発生、責任の放棄、与論の無効などの事実を耳にする。これは、理想的な形態が決して完全には行われていないことを提示している。これらの問題は皆、実際の農村生活の一部

分であるが、書物には略されて述べられない。しかしこれらの、道に反し俗に背く事件の多寡や、個人の移動^(邦訳註4)と価値観の衝突が社会の持続と安定に与える影響、およびそこで求められる調整など、いずれも知つておくべき重要な事実である。もしこれらの事実が、陶先生が二〇年前に先の本を書いたときに重視されていれば、外来の新勢力が日増しにせまり、価値観の衝突も起こりやすく、個人もおのずと個別行動を取る機会が増えた時期にあって、これらの事実は、さらに多くの注目を集めたことであつたろう。一九一五年に陶先生は、個人主義が徐々に侵入しているが、それが我々の家族制度に変遷や修正をもたらすのか否かは、時間を経て初めて知ることができる、と述べている。現在、この家族制度がどの程度まで変遷や修正を受けているのかは、一つの重要な問題となっている。例えば、子女が新式の教育を受けている中で、家庭内の婚事に対する父権がどの程度減少しているのか？ 農村経済の衰退に伴い、男子が家を離れて生計をたてた場合、家庭経済の関係はどうなるのか？ 普通の農民の、儒教の教義の実行やその理解はどの程度か？ これらの問題に対する一般的な見解は簡単に得られるものの、それらは印象的なもので、より適切な証拠や統計的な根拠が求められる。どんな「微視的」な観察でも、普遍的な概観を得るには不十分であるが、この緻密な考察を通してのみ、事実を確立することができるし、科学の結論は、適切な事実をその基礎としなければならない。

ここで我々は、普通によく用いる際に問題となる、調査票による調査の欠点について触れておきたい。調査票に列挙された質問事項には限りがあり、各項目も往々にして個別の情況における差異を十分に表現することができない。しかも、この種の方法で得られる資料は言語による回答であるため、観察しうる実際の行為と比較をし、考察を加える必要がある。

上述の緻密な研究方法の要点は、観察者が実際に目撃した事実に加えて、言語による叙述資料を傍証として用いるというものであるが、この種の叙述資料は、現実の手引きや投影に過ぎず、しばしばその来源の特殊な状況

によって左右されるということを、認識すべきである。要するに、この方法の目的は、ある期間内における一つのコミュニティーの側面の構造と機能を認識することにある。ここで一つの問題、即ちこの種の研究において、歴史はどのような地位を占めるのか、という問題が生じる。フィールド・ワークにおいてこの方法を応用している現代の人類学者の多くは、自分が研究している制度の歴史的変遷を顧みようとはしない。その理由は、文字を持たない民族、特に考古学の材料も希薄で散逸している地方では、歴史的変遷というのは再構成という方法をとるしかなく、しかも歴史の再構成に必要な仮説はあまりに多く、結果としてこうした仮の歴史は用いることができない、というものである。調査地に常にみられる多くの歴史伝説も、その社会の現在の法令制度を形成し、維持させる機能を持つだけで、真実の史料と見なすことはできない。これらの伝説は、想像した過去でもって現状を投影させたものであり、決して過去から現在にいたる変遷の解釈ではない。もっとも中国の場合は、こうした見解は不適切かも知れない。というのは中国には確かに多くの史蹟が残されており、それらは人民によって、さまざまな方法を講じて保存してきたものであるからである。(邦訳註5) 孝子、節婦、賢君、名臣、聖人、老儒者らの言行録の大部分は、道徳や規律の引証や解釈として用いられてきた。中国における「歴史的記載」とされるものの中には、「倫理および政治の例証」の項目に分類されるべきものが多く含まれている。それらは規範的な性質のもので、歴史的な性質のものではない。もちろん、この他にも純粹に歴史的な叙述資料も多くあり、さらに考古学上の発見や、芸術形式の研究、文字の訓詁なども存在する。学者はこれらから、諸制度の変遷の史実をかなり正確に知ることができるし、悠久の時間の中で、地方性の変異が如何に発生したかという経過をもみることができよう。調査にのぞむ研究者は、対象とする社会の性質を正確に解釈する必要があり、これらの歴史史料の重要性について認識する必要があるし、能力の許す範囲内においてこれらを利用すべきである。但し、ここで訓練上の困難が生じる。西方の社会学者の中で、

中国語文献を総合的に研究するのに必要な訓練を受けた者は、非常に少ないか、殆どいない。逆にこの種の訓練を受けている者（即ち、中國人学者からみて漢学通と認め得る西洋人）は、通常、社会学の訓練を受けてはいない。思うに、中国での普通の社会研究において、社会学者はある種の活動の場を持っており、時間的には現在の活動に限って、空間的には小さな範囲の社会関係に限って、もっぱら研究を行い、統計などその他の方法による研究や解釈、時間の経過による変遷の歴史、及び大きな範囲における社会関係の含意などは、別の専門家に任せているかのようである。理論上、各社会科学の間で相互の補完が必要なことは明白で、もし社会学者の中で実地調査を行っていない者があり、彼が正確に、科学的に材料を解釈したいと欲すれば、この種の互助はなおさら必要となってくる。彼は自らの貢献が、詳細な観察と各個人間の複雑な関係の分析を通して、大きな範囲の研究が結論を下す際に必要な根拠を提供し、また普段目の届くことのない複雑な関係を指摘することによって、より深い研究を促すことにある、と自覺している。中国には豊富な文字による典章が残されているため、社会学者はある種の実際的な落とし穴があると感じている。即ち、社会学の研究が過去でもって現在を解釈することに集中してしまい、同様に重要な、現在でもって過去を解釈するということをおろそかにしてしまうことである。

親族制度において、この点は特に明らかである。未開のコミュニティーの研究であろうと、文明化されたコミュニティーの研究であろうと、親族制度は人類学者や社会学者らが常に討論してきた題材であり、とりわけ人類学者らは親族制度を研究する上での数々の専門技術を生み出してきた。彼らは家譜や呼称制度、住宅と村落の分布、耕地の図表などを収集し比較を行い、これらの事実を、親族間の権利や義務、実行時の道徳的・宗教的・経済的・法律的な制裁、及び親族間で日常的に相対する行為などと関連づける。これらの材料に基づいて、彼らは研究するコミュニティーにおける親族集団の性質や機能を比較的正確に規定することができるし、親族の

結束の原則と、その他の結束力との相対的な力関係を提示し、さらに血族・親戚・父系親族・母系親族などの親族関係が、実際のさまざまな社会生活において如何に作用をしているかを指摘する。人類学者もまた徐々に、一つのコミュニティーにおける親族構造とその他の構造との複雑な関係に注目しつつある。経済資源の支配とその使用、政治権力の行使、宗教信仰とその活動などは、多かれ少なかれ、親族関係にかこつけて発生した機能である。

親族制度が中国社会において基本的な重要性をもっていることは、皆が認めるところである。西洋の学者はこの問題の研究にすでに重要な貢献をなしている。当初は、Von Möllendorff や、Jamieson, Parker などが、やや新しいところでは Doolittle, Smith, Wilkinson, Kulp などの研究がある。^(邦訳註6)彼らの研究はいずれも、親族組織の問題の一いつ側面に偏っており、法律と歴史の二つの側面に最も注意が払われ、詳述されているようである。中国人学者は新しい方法を応用して、親族制度についても特殊な研究を行ってきた。例えば、著作としては陶履恭や梁宇臯などが、論文としては Chen [陳] と Shryock の共著、吳景超、馮漢驥などがある。^(原註3)中国社会に対して直接的な知識のない社会学者にとって [即ちファース自身]、これらの研究の長所や短所を適切に評価することは容易ではない。但し、これらの著述が読者に中国の親族制度の実際の作用を了解させることができるか否か、という一点に限るならば、批評を加えることができよう。この方面からいうと、最もよい叙述として Kulp の研究^(原註4)を挙げるべきであろう。彼は広東の鳳凰村における各方面の生活を研究し、政治、親族、及び宗教生活間の密接な関係を重視している。しかし、言語が村落生活において占める重要な地位については、略され論じられていない。陶履恭や梁宇臯の村鎮の研究書においては、豊富な資料でもって家庭組織を論じた一章があるが、やはりこの側面はおろそかにされている。親族制度における言語面の資料を探してみると、これらの著述には確かに複雑な親族呼称の表が収められてはいるが、これらの表と実際の

制度上の行為との関係については、やはり〔説明が〕欠如している。しかも、費孝通が最近、明白に指摘しているように、これらの著者は常に文字による親族呼称を重視するという先入観があるため、日常の話し言葉にみられる呼称の重要性を軽視してしまっている。彼らはせいぜい日常の呼称を、文字による標準的呼称の変異としてしかとらえていない。同時に、彼らにはさらに、これらの資料でもってあたかも中国全体に高度の一律性があるとみなし、否定しようのない地方の差異を無視するという、強い傾向がある。人類学者は常に実証的な通則を探し求めるようにするもので、人類学者の観点からいうと、親族語彙の研究を始めるにあたって、それぞれの地方にはそれぞれ固有の言語の慣例があり、それらは当地の親族構造や社会制度と交織している、と仮定するのが理想的である。各地の実地調査の成果を比較すれば、類型や変異、及びそれらと文字による標準的呼称との関連などが、自ずと概観される。しかも上述のように、親族研究において文字の伝統を重視するのは、行為の規律を摘録しただけであって、行為の現実を叙述したものではない。また概括的な語彙でもって述べているだけであって、個別の実例を觀察し審査や比較をしたものではない。現在、費孝通が吳江にて、林耀華が福州にて（吳文藻先生の指導のもとで）行っている研究は、比較と実証の基礎の上に、これらの側面の調査研究を導入している。しかしながら、この広大な領域は、今後、より緻密な開発が待たれる。

私が特に、具体的な事実の必要性、及び親族制度と社会生活の他の側面の機能との相関関係に注意を払うよう提案するのは、決して理論の為だけではない。実用面においても、農村生活の構造改革を目指すどのような建議であれ、親族制度が中国社会に占める基本的な地位に注意を払う必要がある。社会学者、及び社会改革の運動家が、政治関係の事実と見なしているものは、小さな範囲のコミュニティーにおいては、しばしば親族関係の機能そのものである。村長、あるいは長老の集団的な権力は、基本的には常に、彼と被統治者との親族関係によって生み出される。経済関係もまた

常に、親族の問題に波及する。例えば、灌漑制度において水量の分配の際の親族関係への依頼度は、最もいい事例かもしれない。慈善や救済事業でも、単に「良いことをする」という動機だけではなく、親族としての責務の原則が含まれていることが多い。

西洋文化が侵入し、新思潮が蔓延する中で、地方的な親族の連携は、より広範囲の経済的・政治的な連携へと転換していくであろう。このことは必然的に社会関係において「個人の確立」^(邦訳註7)を引き起こし、多くの人々の地位に対して不利な反動を引き起こすかも知れないし、とりわけ、人口の増加と経済の流動性は、家庭生活の特質や親族制度の作用に何らかの影響を与えるかも知れない。この場において問題を提出することは、その答えをだすよりも遙かに易しい。しかし現在のように〔社会変化の〕初期の状態においては、少なくともこれまでよりもさらに慎重に〔現状を〕整理することによって、将来、変化するであろう方向への指標を作ることができよう。

編者の言葉：本文の作者は英国の著名な機能主義派の人類学者で、*Primitive Economics of the New Zealand*, 及び *We, the Tikopia*などの名著がある。近年来、ロンドン大学で教鞭を取っており、巨匠であるマリノフスキイ氏の後継者と目されている。吳文藻先生が昨夏、渡英した際に、一九三八年に訪中し、講義をすると同時に実地調査にも加わるとの約束を得たが、不幸にも時局の関係で、氏は計画の変更を余儀なくされた。あるいは、一両年後には約束を履行できるかも知れない。本文は氏が本刊の為に執筆したもので、英国では未発表である。文章は長くはないが、氏の中国農村社会を研究するうえでの当面の方法の見解を、かいま見ることができよう。

註

(原註1) 喬啓明・應廉耕 「農業貸款與佃權」『經濟統計』第四期、一九三七年二月

(原註2) Tao, L.K., and Liang,Y.K., *Village and Town Life in China*, London: London School of

Economics and Political Science, 1915.

- (原註3) Chen, T.S. and Shryook, J.K., "Chinese Relationship Terms", *American Anthropologist*, Vol.34, No.4, Oct. 1932. Wu, C.C., "The Chinese Family: Organization, Names, and Kinship Terms", *American Anthropologist*, Vol.29, No. 3. Feng, Hau-Yi, "The Chinese Kinship System", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol.2, No.2, July, 1937.
- (原註4) Kulp, D.H., *Country Life in South China: The Sociology of Familism*, New York: Bureau of Publication. 1925

(邦訳註1) 原文は「海洋洲」であるが、これはオセアニアを意味する「大洋洲」のことであろう。

(邦訳註2) 原文には不明瞭な点あるが、「民族時」の後に「一様」を補うと、「和～一様」となって意味が通る。

(邦訳註3) 「可能」の前に、「取得」を補うと意味が通る。

(邦訳註4) 原文は「異動」だが、「移動」の誤植の可能性もある。

(邦訳註5) 原文は「取法」だが、これを「設法」の意に解した。

(邦訳註6) Paul George von Möllendorff (1848-1901) はドイツ人の宣教師のようだ、ドイツ語、英語による多くの著作を残している。ファースが彼の名前を挙げた際に念頭にあった著作は、*Das Chinesische Familienrecht* Shanghai 1895と思われる。本書は当時、注目された研究のようだ、翌1896年に英訳と仏訳本が出版され、1920年にはビルマで英訳本の再版がだされている。(The Family Law of the Chinese translated by Mrs. S.M. Broadbent Shanghai: Kelley & Walsh 1896/Rangoon: Government printing and stationary 1920, *Le Droit de Famille Chinois* Paris: E. Leroux, 1896) 彼のこの他の著作としては、*A Manchu Grammer, with Analysed Texts* Shanghai: American Presbyterian mission press 1892, *The Ningpo Syllabary* Shanghai: American Presbyterian mission press 1901, *Die Weltliteratur* Shanghai 1894, *Landmollusken: Ergänzungen und Berichtigungen* zunIII. Bande, Die Landmollusken Wiesbaden: Kreidel,などがある。

George Jamieson (1843-1920) のことであろう。ファースが指している彼の研究は、*Chinese Family and Commercial Law* Shanghai: Kelly and Walsh 1921と思われる。

Edmund Harper Parker (1849-1926) は多くの著作を残しており、そのうちの一冊と言うよりは、彼の研究全体を指しているものと思われる。それらを列挙すると、*Burma, with Special Reference to her Relations with China* Rangoon: Rangoon Gazette Press 1893, *Up the Yang-tse* Shanghai: Kelly and Walsh 1899, *John China Man and a Few Others* London: John Murray 1902, *China and Religion* New York: E.P. Dutton 1905, *Studies in Chinese Religion* New York: E.P. Dutton 1910, *China: her History, Diplomacy, and Commerce, from the Earliest Times to the Present Day* New York: E.P. Dutton 1917, *Chinese Customs* Shanghai: Kelly and Walsh 1918, *A Thousand Years of the Tartars* London: K. Paul 1924, *Hsiung-nu Shih*

(Empire of the Hsiung-nu) Shanghai: shang wu yin shu kuan 1934, などがある。

Doolittle は清末の福建にて調査を行っており、ファースが指しているのは、
Doolittle, J., edted and revised by Hood, F., 1868 *Social Life of the Chinese, A Daguerreotype of Daily Life in China*, London と思われる。

Arthur Henderson Smith (1845-1932) は宣教師として中国に滞在し、数多くの著作を残している。ファースが指している著作は恐らく、*Village Life in China: a Study in Sociology* New York: F.H. Revell 1899, と思われる。彼のその他の著作を列挙すると、*Chinese Characteristics* New York: Fleming H. Revell 1894, *China in Convulsion* New York: F.H. Revell 1901, *China and America to-day: a Study of Conditions and Relations* New York: F.H. Revell 1907, *The Uplift of China: thirty-five Years a Missionary in China* New York: Edu. Dept. Broard of foreign mission of the Presbyterian church in the USA 1907, *Proverbs and Common Sayings from the Chinese* Shanghai: American Presbyterian mission press 1914./New York: Paragon Book 1965, などがある。このうち、*Village Life in China* と *Chinese Characteristics* は邦訳がある（塩谷安夫・仙波泰雄共訳『支那の村落生活』生活社 1941年、白神徹訳『支那的性格』中央公論社 1940年）。

Hiram Parkers Wilkinson (1866-?) のことであろう。ファースが指している彼の著作は *The Family in Classical China* Shanghai: Kelly and Walsh 1926, と思われる。なおこの本は、Arlington: University Publications of America より、1976年に再版が出版されている。

Daniel Kulp は1920年代、上海バプティスト大学で社会学の教鞭をとりながら、英文による先駆的な民族誌を出版している。ファースが指しているのは、原注4にある通り、*Country Life in South China: The Sociology of Familism* Columbia University Press 1925である。本書は邦訳がある（喜多野清一・及川宏共訳『南支那の村落生活－家族主義の社会学』生活社 1940年）。

(邦訳註 7) 原文は「私人性的破除」だが、文脈から判断して、「個人の（親族集団からの）離脱」の意味に解した。

對於中國鄉村生活社會學調查的建議

拉得克里夫·布朗講詞 吳文藻編譯

多年以來人所感知的‘社會調查’，已倡行於世界各處，中國也已受了這風氣的影響。我願意向諸位貢獻一點意見，指出另外一種不同的研究之可能性，這種研究，我將名之為‘社會學調查’。概括的說，社會調查只是某一人羣社會生活的聞見的蒐集；而社會學調查或研究乃是要依據某一部分事實的考察，來證驗一套社會學理論或‘試用的假設’的。由這簡單的區別，就可知社會學調查和尋常社會調查的目的與方法是有些不同的，它是由社會人類學實地工作員研究‘後退文化’中殘存土著民族的簡單社會的經驗中發展出來的。他們從實地經驗的結果，而形成了某種社會研究的方法。近年來受過人類學訓練的學生，已開始應用同樣的方法，來研究較進步的社會中的地方社區，例如：高邇博士 Dr. Charlotte Gower 之研究西西里的一個小鎮；華納教授 Professor Lloyd Warner 之指導哈佛大學生研究康涅狄格州 Connecticut 紐巴立港 Newburyport 和密西西比 Mississippi 州那拆茲 Natchez 等地方。這些研究的結果，都還沒有發表，但不久即可以看得到的。此外哈佛大學又在愛爾蘭，克雷耳州 County Clare 之一部進行一種相似的研究。芝加哥大學（在拉得克里夫·布朗教授指導之下，—譯者注），正在進行日本九州熊本縣熊郡六工村之調查。（按九州之熊本地方係日本文化之發源地，與西洋文化尚少接觸，保存固有文物制度尤為完備，故被選為日本農村生活的代表研究地區。—譯者註）

我們中間有一部分人相信，若能在全世界許多不同的地方進行同樣的工作，定可以為‘比較社會學’得到重大科學價值的結果。同時對於所研究的社會還供給了一種‘內察’，為尋常社會調查的方法所不能達到的內察。這樣勢必需要多數研究者的合作，和他們在世界各不相同地方所作研究的互相聯絡。

在科學的研究中，方法常為理論或假設所決定。（參觀懷第黑思想的探險第二八三至二八七頁，節譯見附註。）而所有的觀察則常為興趣所左右。若我們的興趣只在實用，則我們的觀察只在實際問題上有價值，對理論科學則只有極小的價值，或竟完全無價值。反之，如果我們的興趣純粹是理論的，（好比純粹科學家的興趣，如‘數學的物理學家’的興趣，或生物學家的興趣），並且我們的研究足以圓滿的給我們以‘現象的新的理論的智識’；則這樣的新智識為那祇有實際興趣的人，可有真正的重要。故欲求觀察之合於科學，必須為一種理論或‘試用的假設’所領導。一種方法的價值，（兼指由方法所得之理論的與實際的價值）要看它所根據的理論如何，亦就是要看它對於適合事實的妥當性如何。

我所採用的已經應用過並在研究中實驗過的假設，可陳述之如下：

(一) 一個特殊社區的社會生活的各方面，均係密切的相互關聯着，或為一個統一的整體，或體系中的各部分。任何一方面，除非研究它和其它一切別的方面的關係，不易正當的明瞭。因此，一個村落的經濟生活，除非考慮它和家族或氏族組織，宗教，以及‘社會裁認’ Social sanctions 的制度等的相互關係，則不能完全明瞭。這樣可以說，每一種社會活動都有一種功能；而且只有發現它的功能，才可以了解它的意義。任何活動的功能，任何風俗或信仰的功能，就是把社區看作一個統一的體系，來定它在這整個社會生活中的地位。

(二) 一個社區的社會生活基礎便是一個特殊的社會結構，亦即是將各個人聯合為一個集體的一組社會關係。所以社會的綿續，社會生活的綿續，是依賴着結構的綿續的。

(三) 社會功能與社會結構兩個概念，可連合為一個社會體系的概念，這概念包含兩方面：一方面是外界的適應 adaptation，社會體系是某數量的人類在一個特殊自然環境中供給他們物質需要的一種機構。另一方面是完整 Integration 社會體系靠着個人利益的和諧，連合與調適而將人類聯成一起。社會結構就是這個完整的產物，或者說它本身就是這個完整。任何社會活動的功能，就是它對於適應或完整的貢獻。

這樣我所引用的方法可規定之為：社區視作體系的研究，包括着兩方

面；是即適應與完整。

直到最近，這種研究方法僅應用於較後退民族的狹小的，而且是比較隔離的社區，如澳大利亞，美侖尼西亞，非洲之土着部落。這一種社區的社會生活，只須一個調查員，即可將它的整個加以研究，但應用同樣方法於較大較複雜的社會如美國與中國時，就有許多困難。這一種社會勢必視作許多較小社區相互關聯而成的一個集體。所以中國可說是省，縣，鎮，村，或最小的單位，‘戶’的集體。因此，吾人研究必須由最小的單位‘戶’起始，由此而推廣至於全國，乃至整個的世界社區，而中國乃是整個世界社區的一部分。

在中國研究，最適宜於開始的單位是鄉村，因為大部分的中國人都住在鄉村裏；而且鄉村是够小的社區，可供給一兩個調查員在一二年之內完成一種精密研究的機會。

一個完全的鄉村社區的研究，包括着三種分別的而却相關連的研究。

甲，橫的或同時的研究 Synchronic or monochronic Study，（亦即所謂之‘靜態研究’——譯者注。）係研究某指定期間內某社區的內部結構和生活，而不涉及其過去的歷史，或正在進行中的變遷。

乙，鄉村社區的外部關係的研究；即係研究該社區與其它種種社區的外部關係，以及本社區與較大社區的外部關係，而本社區即比較大社區的一部份。

丙，縱的或連綿的研究 Diachronic Study，（亦即所謂之‘動態研究’——譯者注。）係研究內部結構與外部關係中已經及正在進行中的變遷。

以上三種研究，只要該調查員能將此三者分別清楚，即可由他獨自同時進行。

用這種方法來作一個鄉村的橫的研究，首須發現並記錄它的整個的內部結構，亦即各個人間的各種社會關係。

第一，鄉村是一個隣里羣，固然在一個大的鄉村裏，或者還可以分成若干小隣里。第二，鄉村是一個‘戶’的集體，而連合各戶內部分子的社會紐帶便是家庭或親族；但親族的紐帶，亦能把不同鄉村，不同戶的分子連合起來。有時候整個的村就是一個親族羣，如華南的單姓村。社區中一切分子的

血緣關係，必須認作社會結構中極重要的部分，而加以研究。在這種研究裏，應用黎佛士 W. H. R. Rivers 首先創行的族譜方法，并附一張地圖以標明村中住戶的坐落地方。這種方法是很有用的，雖則不是主要的。戶的組織以外，通常尚有氏族或家系的組織，即村內的一種親族團體，亦須要認作結構的一部而加以研究。

一般鄉村組織和有特殊目的的組織，（如青苗會，廟會，行會等）均係形成結構的重要因素。那裏如有秘密結社存在，也不妨加入研究，雖然這些是顯然的不易研究的組織。

末了，社會結構中又一重要的一方面，是社會生活中各式各樣的個人的任務的化分。第一而又是最基本的化分，是以‘性別’與‘年齡’為根基。此外尚有職業及社會地位之分，固不論此地位之由於品位，財富及經濟境遇，或由個人的領袖能力。

這裏所建議的方法，乃就社會生活一切不同的方面，與整個社會結構的關係而加以研究。所以要這樣分別的研究，純係為了一種方便。有幾種特殊的研究題目，不妨列舉出來。但有必須著重者，這裏所提議的方法的主要性質，就在進行任何特殊題目的研究時，必須把整個社會生活放在心裏。因此，我們不應該研究一個鄉村的經濟生活或宗教生活，而應該研究鄉村生活的經濟方面或宗教方面才對。

家族和家族關係之在中國，特別是在鄉村的中國，既然有優越的重要性，則在社會結構已經決定大綱以後，或者開始研究一個鄉村的頂好方法，就是由社會生活視作一個整體，而來考察家族，氏族和親族在其中所發生的功能。這種研究當然包含着對於經濟生活，土地所有權，以及社會生活中許多別種因素的考慮。

技術制度亦可以當作一個特別考察的題目。它包括了日常生活中所製作或應用的各種事物的研究，例如耕種與建築的技術，以及技術活動所根據的各種技巧與智識。

一種經濟生活的研究，自然包含着對於技術制度，家族和親族的功能作用，以及社區的外部關係的認識。

另一個可以單獨研究的重要題目，則為‘社會裁認’在控制個人行為時所發生的功能。所以我覺得單是研究犯罪毫無用處，除非同時研究那控制行為的輿論，宗教，以及倫理教訓等的效果。

禮節和儀式有特殊研究的需要，研究時必須注意其與生，婚，喪，祭的關係，以及其與特殊宗教崇拜的關係。禮儀的意義的解釋，本是一件極困難的事情。此種工作，惟有根據若干精密的研究，並參考歷史的文獻，方能擔當。關於此點以及有關社會生活的其它種種方面，我們必須詳細觀察社會生活的常年節律，以及它與季節變遷中一切自然現象的相關。

一個極重要的題目為文化或教育的研究，即研究一個個人社會化的歷程，看他從青年起，如何獲得智識，技巧，品格，以及一切行為，思想與感情的習慣，而使他適合於社會生活中的某一種地位。至於正式學校的教育，只不過是這歷程中的一小部分，我們應當考察一個人社會化的整個歷程。

與廣義的教育及‘社會裁認’有關的一個題目，便是個人對他的社會環境所作調適的種類與程度。這種題材的系統研究，可以稱之為個人心理學。這個題目，凡為精神病學者以及從事於教育或社會服務的人，是沒有不常常予以極重大的關心的。

最後可以提到一個目前或者尚未足以加以嚴格的科學研究的題目，即是對於指導及控制各個人行為的思想與情操，作系統的研究。這些思想與情操，乃是一個文化或文明的特質之所由來。而這特質即該文化的‘民族精神’ethos。所以不但中國與歐洲的價值觀念以及信仰或思想制度迥乎不同；即在中國一國之內，農村與都市有差別，此地與彼地亦有差別。這一種研究，在我們對於社會生活的一切方面，沒有得到廣博的智識以前，是不能進行的。

一個鄉村社區的‘外部關係’，在任何社會生活的研究中，必然會引起調查員的注意的。但是依照我們的工作計劃，既然以鄉村為一個分開研究的單位，就必須對於這村的一切外部關係，加以特別的研究；即是從整個的來研究這些外部關係以及觀察它們在內部社會生活中所佔的地位。我們相信只有應用此法，才能決定所研究的社區之相對的獨立程度，或隔離的程度。

現在我們姑捨外部關係的研究，而專談連綿的研究，即社會變遷的研究。

觀察‘變遷’最準確的方法，即在若干年限之內，反覆的觀察已研究過的鄉村。這是一個理想方法，應用極難。近來支加哥大學人類學系正向這一方面作實驗。埃耿博士 Dr. Fred Eggan 新近費了一年功夫，研究一個菲列賓部落的現狀——二十年前科耳博士 Dr. Fay-Cooper Cole 已在該部落中作過精密的研究——藉以觀察該部落在這過去期間所發生的一切變遷，主要的注重該部落自與美國文化接觸以來所產生的結果。在研究某一段時間中的某一社區時，對於正在進行中的社會變遷的本質，很可以得到一些線索。老年人可以詢問他們親眼所看見的變遷，固然他們的陳述必須極慎重的加以應用，而且採取嚴格的批評方法，以去僞存真。

用一個間接的方法，來觀察一個地區因與外力接觸而起的社會變遷的時候，頂好選擇幾個受有同樣影響而不同程度的社區加以研究。例如勒得飛爾德博士 Dr. R. Redfield 正在指導墨西哥幾個地方社區的精密研究，從與現代文明接觸極少，並且是後退而隔離的馬雅印第安人 Maya Indians，再進而研究許多中間的社區，直到現代文明已有顯著影響的市鎮。他用了這種方法，始能研究從僅僅受過輕微的西班牙影響的馬雅‘民俗文化’，到近代墨西哥市鎮的都市文化的變遷。理查茨博士 Dr. A. I. Richards 在北羅蒂西亞 Northern Rhodesia 一個非洲部落中，選定三個地方社區，作類似的研究，目的亦在觀察這些社區和歐洲文明接觸後所發生的變遷。

最終說到這種研究的目的，我們所希望的結果是：

(一) 這些研究都是對於理論的‘人類社會的科學’的貢獻。它們在社會科學中，等於物理科學的實驗。理論社會學上的種種假設，可由特殊例證，及具體事實的特殊搜集而証驗。所有社會底科學之進步，必須依據比較方法的應用。因此，我們在可能範圍之內，必須盡量作‘不同形式社會’的精密的研究。研究中國目前的社會，不僅必須和中國過去的社會以及與歐美社會來比較；同時亦應與原始民族的簡單社會來比較。

(二) 這種研究對某特殊社區，即研究的對象，與同一大地區內的類似社區，提供一種更深刻的瞭解。這種瞭解有實際的價值，可以對社會改革及社會服務界提供一種‘學以致用’的健全基礎。我們可以主張，如上述的這種研

究，對實際工作，較諸僅重實際問題而不及社會普通理論的研究，將有更好的指導。現在也許還沒有實現，然將來一定會是這樣的。這種主張可由應用社會人類學在新幾內亞及非洲所得的結果而成立。物理科學中對控制及應用自然力所得到的最重要的結果，乃由純理論的研究中得來。所以我們可以希望理論的社會的科學的發展，能使我們在控制社會力量上得到實效。

(三) 對於現存且便於精密研究的社會，有了更澈底而系統的認識，則對於過去的社會，可有進一步的了解。固然歷史學家常說，對於過去的認識，有助於現在的了解。反之，從社會學家的立場來看，我們也可以說，對於現在的了解，亦有助於過去的認識。這尤以社會綿續性延至數千年的中國，特別顯得確實。

附注：懷第黑：思想的探險 Adventures of Ideas (第二八三頁至二六七頁。)

“方法和理論的密切關係，一部分由於‘證據的適切，乃依據於那霸佔討論的理論’的事實而發生。這種事實就是為什麼要把優越的理論亦稱謂‘試用的假設’working hypothesis的理由。”(第二八三頁，“理論指定方法”節。)

“許多混亂的哲學思想，係起源於忘却了‘證據的適切乃為理論所指定’的事實。……這也是在任何科學中不能產生有充分應用範圍的任何理論，所以進步自必極緩的理由。我們所希望的是什麼，如何連絡零散的觀察，都不可得知。”(第二八四頁。)

“每一種方法是一個‘適切的簡易化’。但只是同性型式的真理，方能用任何一種方法來考察，或用方法所指定的辭句來陳述。因為每一個簡易化就是一個過簡化。”(第二八五頁。)

“一種方法就是用以應付材料或證據的一種手段。”(第二八七頁。)

中國農村社會團結性的研究

——一個方法論的建議——

Raymond Firth

費 孝 通 譯

農村社區研究是中國農村社會學的焦點及基礎。這種工作的重要性是不至於說得過火的，尤其是在目前為然，因為我們亟需知道西洋文化及本國社會政治新思潮對於農民究竟已有多少影響，以及對於他們各個人間的關係及團體的結構和活動究竟引起了多少變遷。

農村社區研究計劃的要旨是在一羣較小的社會單位中作深入詳盡的研究，一方面分析那些使社會得以完整持續的勢力，另一方面分析那些使社會發生變遷的勢力。以一村作研究中心來考察這村人民相互間的關係，如親屬的遠近，權力的分配，經濟的組織，宗教的皈依，及其他種種社會聯繫，並進而觀察這種種社會關係如何相互影響，如何綜合以決定這社區的團體生活。從這研究中心，循着親屬系統，經濟往來，社會合作等的路線，推廣我們的研究範圍到鄰近村落以及市鎮。在這裏我們就可以見到村落社區自足的程度，所謂自足並不限於經濟一方面，而是兼指其他種種社會需要的滿足。

精密的研究這些問題，我們將用人類學者所用的方法。或者有人會發生疑慮：從研究人口稀少，文字缺乏及器物簡陋的簡單社區時所產生的方法，在那種程度上是可以用來研究這幅員廣大，人文悠久，器物富麗，宗教複雜，哲理深奧的中國？若是一個人類學者自以為從他特具的觀點上去研究中國，可以和他研究海洋洲或非洲少數民族時一般地對於該地文化能作相當概括性的結論，綜合地說明‘中國社會’的性質，單是地方性的變異一點，已足把他難住了。可是這地方性的變異本身却給了他有所貢獻的機會。例如福建的宗

族村落及華北的非宗族村落的相異之處，就提示了在對外文化接觸時所有的反應上也可以有重要的差異；個人間關係的改組，兩地就不易出於相同的路線。這點是很重要的。任何農村改組的基本方案要能有效的實施，須先對於各地方的特性，實施時可能的成效，及不易避免的阻力等，都得有正確的認識。雖則目前我們對於各省的村落及家庭組織的型式大體上已有相當認識，可是若用精密的方法再加研究，或許可以發見種種尚沒有想像到的地方特性。無論如何，我們若要作科學性的概論，現有的知識還不够把各種型式加以詳細的界定，它們的地域分佈也尚待考查，同一型式中細節上的差異也還要細究。這些工作要能健全發展，一定需要我們所謂‘顯微式的社會研究’(micro-sociological)，用來補充已有的‘概況式的社會研究’(macro-sociological)。而且，那些已有的關於農業經濟，信用，家庭收支等精密的研究，若在社會關係的網絡裏重加考量，也許可以得到更大的意義和價值。例如喬啓明和應廉耕所指出在河南，湖北，安徽，江西農村信用借款最重要的來源是在朋友親戚之間，前者居百分之四五，後者居百分之三八（雖則因農民不願說出向放債者借錢的實數，正確的統計不易得到）。普通的利息在本族借款中是從二分五釐，到四分二釐。¹⁾ 這種信用制度的重要性就在顯示親屬和友誼是經濟互助的通路，而且提示了這種金錢上的往來，並不完全是商業性質，而是受着其他社會聯繫的作用。這些債款既然在普通情形中不是用來作生產事業的投資，而是為糧食及婚喪等舉動，我們就可以進而推考債主是否有非經濟的報酬，如參加他所幫助舉行的儀式，或得到其他社會性的服役，而且我們還可以觀察親戚感情，朋友交誼，在什麼程度上是用作信用的基礎。要瞭解這些事實，我們必須分析當地的婚姻及喪葬制度，親屬友誼上的道德壓力，人民對於互惠關係的一般見解，以及各種保証償債的制裁。這裏我們不能不用‘顯微式研究’的技術，以考察各種相關社會情境中私人間的關係及各個人實際的行為了。

還有一方面可以說明這種精密研究的用處。因為中國有極長的，關於家庭生活和親屬責任的文字傳統，於是中國學者和對於中國有所著述的西洋學

1) 喬啓明 應廉耕，‘農業貸欵與佃權’，經濟統計，第四期，一九三七年二月。

者似有一種傾向，常用一種成文的規律來描寫社會制度，而忽視了可以直接觀察的人民實際活動；更時常偏重於‘士大夫’階級如何欣賞及遵守這些規律，而不去觀察這些規律在一般不識字農民的實際生活上如何作用。例如在陶履恭及梁宇皇合著的那書中，²⁾ 我們見到這種規律下的或理想型式的親屬及地方組織如何順利運用的情形。也許在許多地方確是如此，但我們時聞有爭執事件的發生，責任的譴棄，以及輿論的無效等種種事實，這都提示說：此種理想型式並不是完全行得通行的。這些問題都是農村實際生活本身的一部分，那書中却略而不述。可是這些違道叛俗事件的多寡，個人的異動和價值的衝突之影響於社會持續與完整，以及其中所必要的調整等，都是應該知道的重要事實。若是這些事實在陶先生二十年前寫那本書時已經是重要，那在眼前外來的新勢力日益加緊，價值衝突更易發生，個人自是獨行的機會更多的時候，這些事實自然是更值得注意了。在一九一五年陶先生會說：個人主義逐漸侵入；它是否將引起我們家庭制度的變遷或修改，須待日後才能知道。現在究竟這制度已變遷和修改到什麼程度自是一個嚴重問題了。例如：在子女已受新式教育的家庭中，父權在婚事中的效力究竟減少到什麼程度？因農村經濟衰落，男子離家謀生後，家庭經濟關係如何？普通農民對於儒家的教義實行及瞭解的程度如何？對於這些問題普通的意見是很容易得到的，但是都限於印象性質，還需要更確切的憑証及統計的根據。任何‘顯微式’的觀察固然並不足以有普遍性的概論，可是惟有從這種精密的考察，事實才能確立，科學的結論不能不以這種確切事實作基礎的。

在這裏也許我們可以提到普通常用的問題表格調查方法的缺點。在表格中所能列舉的問題常是有限的，表中各項又往往不能容許個別情境中的差異之點充分表現，而且由這種方法所得的材料——用言語所表示的答案——須在與能夠觀察到的實際行為相比較之下，加以考慮。

上述精密研究的方法主要的是在觀察研究者所能親見的事實，然後再用言語敘述的材料為旁証，但我們只認這種材料為現實的嚮導和投影，處處為

2) Tao, L.K., and Liang, Y.K., *Village and Town Life in China*, London: London School of Economics and Political Science, 1915.

其來源的特殊情境所左右。要之，這方法的目的是在認識某一時期內的一個社區的橫面結構與功能。

這裏有一個問題，就是在這種研究中歷史占什麼地位。在實地研究中應用這方法的現代人類學者，大都對於他所研究的制度的歷史演變置之不顧的。他的理由是這樣：在沒有文字的民族中，尤其是考古學材料稀少及零星的地方，歷史演變祇能出於重構一途，而重構歷史所需要的假定太多，結果這假歷史對於他無何用處。就是當地常有的許多歷史傳說，在他亦祇能當作一種形成及維持社會現狀的典章，不能視作真實的史料。這些傳說是用意想的過去來構成的現狀的投影，並不是從過去到現在確有演變的解釋。在中國也許這種說法是不適切的。可是在中國確有很多史蹟是因為它們可以使人民取法才保存下來的。孝子，節婦，賢君，名臣，聖人，宿儒的言行錄，大部分是用來作為道德規律的引証及詮釋。在中國的‘歷史記載’中有很多是應當歸入‘倫理及政治例證’一項之中——它們是規範性質，不是歷史性質。當然，此外尚有很多純粹敘述性的歷史材料，再加上了考古學上的發現，藝術形式的研究，文字的訓詁，學者自能依此得到有相當正確性的，關於各種制度演變的史實，並可以見到在這悠久的時間中地方性的變異如何發生的經過。一個實地研究者要對於他所研究對象的性質作正確的解釋，自須承認這些歷史材料的重要性，而且應當盡量在其能力範圍內加以利用。但是，這裏有訓練上的困難。西方的社會學者很少，或甚至沒有，對於中國文獻能有此種綜合研究的必要訓練，有這種訓練的(即使承認在中國學者眼中確有西洋的漢學通)通常也不易兼有社會學的訓練。在我似乎覺得在中國的普通社會研究中，社會學者確有一個園地，可以專作在時間上限於現有活動，空間上限於小範圍的社會關係的研究，讓別的專家去用統計等其他方法來研究及解釋：在時間過程中演變的歷史及大範圍的社會關係的涵義。理論上說來，各社會科學間需要彼此互助是極明白的；也許在社會學者之中沒有比實地研究者，當他想正確地科學地解釋材料時，更需要這種互助了。他自覺他的貢獻是在從詳盡的觀察及從各個人間實際繁複關係的分析，供給大範圍的研究以下結論時所必要的根據，並由指出平常所沒有注意到的複雜關係，而激起更深入的研究。因為

中國有豐富的文字典章，他覺得有一種事實上的危險，就是社會學的研究祇集中在以過去解釋現在，而忽畧了同樣重要的以現在解釋過去。

在親屬制度中這一點尤其顯然。無論研究初民社區或文明社區，親屬制度總是人類學者及社會學者常常討論的題材，尤其是人類學者，他們已經產生種種研究親屬制度的專門技術。他們搜集及比較家譜世系，稱謂制度，住宅及村落分佈，耕地圖表等；更把這些事實關連於親屬間的權利及義務，和實行時的道德的，宗教的，經濟的及法律的裁制，以及親屬間日常相對的行為。依這些材料，他們能比較正確的規定他所研究的社區中親屬團體的性質及功能，顯示親屬的團結原則和其他團結原則的相對勢力，並指出血親，姻親，父黨，母黨的親屬關係，如何在不同的實際社會生活中發生作用。人類學者也漸注意到一社區中親屬結構和其他結構錯綜的關係。經濟資源的支配及使用，政治權力的行使，宗教信仰及舉動，多多少少是藉親屬關係而發生功能的。

親屬制度在中國社會中有基本的重要性是大家所公認的。西方學者對於這問題的研究已有很重要的貢獻。最初如 Von Möllendorff, Jamieson 和 Parker, 稍近又有 Doolittle, Smith, Wilkinson 和 Kulp 等。不過他們的研究都偏於這問題的一二方面，好像法律及歷史兩方面最被注意及發揮。中國學者應用現代方法，對於這問題亦有些特殊的研究，好像陶履恭和梁宇臯那書及 Chen 和 Shryock, 吳景超, 馮漢驥等所發表的論文。¹⁾ 在一個對於中國社會尚沒有直接知識的社會學者很不易對於這些研究的長短作確切的估價。但是他也許可以從這些著述能否使讀者了解中國親屬制度的實際作用一點上加以批評。從這方面說，最好的敘述該推 Kulp。²⁾ 他研究廣東鳳凰村的各方面生活，曾重視政治，親屬，及宗教生活間的密切關係。可是語言在村落生

1) Chen, T.S. and Shryock, J.K., "Chinese Relationship Terms", American Anthropologist, Vol.34, No. 4, Oct. 1932. Wo, C.C., "The Chinese Family; Organization, Names, and Kinship Terms", American Anthropologist, Vol.29, No.3, Feng, Han-Yi, "The Chinese Kinship System", Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol.2, No. 2, July, 1937.

2) Kulp, D.H., Country Life in South China: the Sociology of Familism, New York: Bureau of Publication. 1925.

活上的重要地位，却畧而未論。在陶梁的村鎮研究一書中材料極豐富的家庭組織一章內，亦忽畧了這一方面。我們若要找關於親屬制度中語言方面的材料，這些著述中固有一些極複雜的稱謂表格，可是這些表格和實際制度上行為的關係，則又付缺如。而且如費孝通最近極明白的指出這些作者常有一種專重文字稱謂制度的成見，使他們藐視了日常言語中所用稱呼的重要性。他們至多把日常稱呼視作文字稱謂標準的變異。同時，在他們更有一種極強的傾向，就是好像即以這些材料來表示整個中國有高度的一律性，而漠視了事實上無可諱言的地方差異。人類學者總是注意於尋獲有實驗性的通則，從他的觀點來說，在開始研究親屬辭彙的初期，最好是假定每一個地方都有一套獨立的語言慣例，和當地親屬結構及社會制度相交織的。比較各地實地研究結果時，關於型式，變異，及它們與文字標準相關連等的概論自然會產生的。而且，如上文所說，注重文字傳統在親屬研究中祇成了摘錄行為的規律，而不是敘述行為的現實；同時只是引用概括性的詞彙來敘述，而不是觀察到的各個實例的審查及比較。現在費孝通在吳江及林耀華在福州（在吳文藻先生指導之下）的研究，已將這方面的工作導入了比較實驗的基礎上，可是這廣大的領域還待深入詳盡的開發。

我特別提出具體事實的需要及親屬制度和其他方面社會生活功能的相關性的注意，並不祇為理論着想。即就實用方面說，任何改革農村生活結構的建議，都應該對於親屬制度在中國社會所佔的基本地位加以注意。在社會學者及社會改良者視作政治關係的事實，在小範圍的社區中時常是親屬關係的功能。村長或長老團體的權力基本上時常出於他和被統治者的親屬關係。經濟關係也時常牽涉到親屬問題。例如灌溉制度中水量分配一事之倚賴於親屬關係的程度，也許是有甚於普通的看法。在慈善及救濟事業中，不單是純粹出於‘做好事’的動機，而常含有親屬責任的原則。

西洋文化的侵入及新思潮的蔓延，地方性的親屬聯繫勢將轉渡於廣大的經濟及政治性質的聯繫。這必然地將在社會關係中引起‘私人性的破除’，而且也許會對於許多人的地位發生不利的反動，尤其是漸增的人口及經濟移動性會影響到家庭生活的特質及親屬制度的作用。在這個園地內提出問題要比

給予答案容易多了。可是像今日這樣初期的狀態，至少可以比一向更審慎地清理一下，以作未來可能演變的指示。

編者按：本文作者係英國著名功能派人類學家，過去有 *Primitive Economics of the New Zealand Maori* 及 *We, the Tikopia* 等名著，年來執教於倫敦大學，儼為大師馬凌諾斯基氏之承繼者。吳文藻先生去夏遊英時，曾約其於1938年來華講學並參加實地研究，不幸因時局關係，氏不能不改變計劃，或於一兩年後始能踐約。本文乃氏特為本刊而作，未在他處發表，文雖不長，而氏對於目前研究中國農村社會的方法之見解，已可見一斑矣。

(2000年1月26日 受理)